老人看護実習による看護大学生の老人イメージの変化

前畑夏子，服部ユカリ，成瀬優知，大野昌美

富山医科薬科大学医学部看護学科地域・老人看護学講座

要　約

本学老人看護実習にて，学生の老人に対するイメージがどのように変化したかを知ることを目的に，実習前後の老人イメージをSemantic Differential method（SD法）を用いて調査した．対象は本学看護学科4年生115名で，老人看護実習開始前と実習終了後の2度の調査を行い，検討した．

調査の結果，以下のことが明らかとなった．

1，因子分析の結果から「行動性」「活動性」「幸福性」「温和性」「有能性」「社会的外向性」「気分性」の7因子が抽出された．

2，実習前の老人に対するイメージでは，学生の生活背景による違いは見られなかった．

3，因子ごとに実習前後の得点を比較した結果，「活動性」「気分性」の2因子が，実習後により肯定的に変化していた．

4，実習前の因子得点別に3群に分け，因子ごとに実習前後の得点を比較した結果，高値群はほぼすべての因子において実習後により否定的なイメージへと変化し，低値群はすべての因子においてより肯定的イメージへと変化が見られた．

5，学生の生活背景により，実習前後でのイメージの比較を行った結果，「活動性」「気分性」において，日頃あまり「老人」と接触のない学生が，実習後により肯定的イメージで捉えている傾向が見られた．

キーワード

老人イメージ，老人看護実習，看護大学生

序

高齢者の増加に伴い老年看護の重要性は増大し，1990（平成2）年度カリキュラム改正で，老年看護学は独立した教科として看護教育の中に取り入れられた．

また，2000年より導入される介護保険制度に伴い，看護職が果たすべき役割は大きく，幅広い活躍が一層期待される．そういった制度としての変化が見られている中で，氏家ら[1]が提言しているように，老年看護学の教育プログラムを作成し，老年看護の専門性が発揮できるような人材を育成することは急務である．そのためにも，教育においては，野口[2]が指摘するように，まず老人とはどのような存在であるのかを学生が知った上で，老人の自我発達のために役立つような看護・介護の方法を見出すような教育を行う必要がある．だが，近年の学生は日常生活の中で「老人」に接する機会が少なくなっており，永井[3]が指摘しているように，言葉が通じる仲間うちでのコミュニケーションに狭く閉じこもり，他世代との交流に関心が薄くなっているといえよう．小山[4]が言うように，そのような世代の学生が老人をどのように捉えているのかを知ることは，学生の学習への準備

性を知る基礎資料として重要である．また，教育によって老人のイメージがどのように変化したのかを明らかにすることは，教育の評価としても必要である．

そこで，本学の実習によって学生が老人をどのような存在と受けとめたのか，臨床実習教育の目的が達成されているかどうか知るための一助として，学力評価[5)6)]の視点のうち，「イメージ」の評価から本学の実習を検討し，今後の実習指導方法の一助とすることを目的として本研究を行った．

研究方法

1，対象：本学老人看護実習を行った4年生115名（1997年度57名，1998年度58名，うち男性1名）

2，調査の内容：調査内容のうち生活背景については多田[7)]が看護短期大学部学生に行った調査項目に準じ，対象者の属性，高齢者に接する機会の有無や高齢者に対する関心の有無など大学生を対象として調査した報告の中で人間性の理解や，対人関係に関連が見られた15項目[8)]を設定した．

老人に対するイメージについては，Osgood，C．Eの考案によるSemantic Differential Method（SD法）[9)10)]を用いて調査を行った．項目は保坂ら[8)]が行った調査で用いた50項目の形容詞対に7段階の評定尺度を設け，その値を尺度の点数とした．また，実習前後の結果を対応させるためにデータの取り扱いについて学生に了解を得て学籍番号の記載を求めた．

3，調査の方法と分析：調査は老人看護実習開始前のオリエンテーション時と，実習終了時のカンファレンス後に同じ自記式質問紙を用いて2回調査を行った．回収は原則として質問紙配布当日又は翌朝で，回収率は100％であった．調査期間は平成9年7月から10年10月までである．

分析にはSPSS統計パッケージを用い解析を行った．学生の基本属性に関する項目については二者択一式で行い，SD法による質問については各項目ごとに7段階の尺度の中央を0点とし，肯定的なものには3点を，否定的なものには－3点を与え，被験者が印を付けた段階の値をその尺度における得点とした．

以下次の分析を行った．

1，実習前後の「老人」に対するイメージの結果を因子分析し，因子の抽出を行った．

2，実習前の学生の属性を表す2群間における因子得点を比較した．（t検定）

①祖父母との同居群と別居群

②祖父母との会話あり群と無し群

③現在又は過去に同居の経験がある群と無い群

④祖父母以外の老人と接する機会の有り群と無し群

⑤老人問題を扱うテレビ，記事を見る群と見ない群

⑥地域看護実習において高齢者に対して健康教育を実施した群と実施していない群

3，因子ごとに実習前後の因子得点の比較を行った．（t検定）

4，実習前の因子得点の上位25％を高値群，下位25％を低値群，その他を中間群に分け，因子ごとに実習前後の得点を比較した．（t検定）

5，2で用いた学生の属性を表す2群間における実習前後の因子得点の変化を検討した．（t検定）

結　　果

1，「老人」イメージの因子（表1）

調査した50対の形容詞について因子分析（最尤法）を行い，kaiserの正規化を伴うバリマックス回転により固有値1.5以上の因子が7つ抽出された．それぞれの形容詞対の因子負荷量を表1に示した．ただし抽出された7つ以外の因子に対し，負荷量の少なかった10個の形容詞対は表には示していない．抽出された7つの因子に対してはそれぞれに「行動性」「活動性」「幸福性」「温和性」「有能性」「社会的外向性」「気分性」のラベルをつけた．なお，これら7因子の累積寄与率は50.45％であった．

2，実習前の学生の属性を表す2群間のイメージ比較（表2～7）

①祖父母との同居群と別居群②祖父母との会話有り群と無し群③現在又は過去に祖父母と同居の経験がある群と無い群④祖父母以外の老人と接する機会の有り群と無し群⑤老人問題を扱うテレビ，記事を見る群と見ない群⑥地域看護実習において高齢者対象に健康教育を実施した群と実施してい

表１　各因子に含まれる形容詞対と負荷量

因子	因子名	形容詞対	負荷量
因子1	行動性	依存的ー自立的	0.630
		魅力のないー魅力のある	0.583
		受動的ー能動的	0.533
		弱いー強い	0.500
		小さいー大きい	0.465
		貧弱なー立派な	0.460
		暗いー明るい	0.443
		狭いー広い	0.432
		愚かなー賢い	0.419
		非生産的ー生産的	0.387
因子2	活動性	地味なー派手な	0.629
		遅いー速い	0.537
		騒がしいー静かな	-0.467
		保守的ー進歩的	0.454
		鈍いー鋭い	0.448
		内向的ー外向的	0.444
		孤立ー連帯	0.375
		目立たないー目立つ	0.351
		暇そうー忙しそう	0.399
因子3	幸福性	感情的ー理想的	0.601
		不満ー満足	0.591
		不安定ー安定	0.486
		灰色ーバラ色	0.403
		悲しいーうれしい	0.376
因子4	温和性	憎らしいー愛らしい	0.726
		威張ったーへりくだった	0.539
		固いー柔らかい	0.538
		厳しいー優しい	0.512
		冷たいーあたたかい	0.478
		疎遠なー親密な	0.372
因子5	有能性	汚いーきれい	0.614
		だらしないーきちんとした	0.498
		無能なー有能な	0.429
		貧しいー豊かな	0.383
因子6	社会的外向性	消極的ー積極的	0.618
		不自由なー自由な	0.577
		閉鎖的ー開放的	0.576
		静的ー動的	0.410
因子7	気分性	弱々しいーたくましい	0.569
		悲観的ー楽観的	0.543

ない群，の２群間において，実習前の「老人」イメージに違いがあるか，各因子の得点を比較した．

その結果，いずれの2群間においても明らかな因子得点の差違はみられなかった．

３，実習前後における「老人」イメージ変化（表８）

実習前後の因子得点に有意な差がみられたものは「活動性」と「気分性」（$p<0.01$）であり，実習後に肯定的イメージで捉えられていた．その他の因子については有意な変化は見られなかった．

４，実習前因子得点別で見た実習後の「老人」イ

表2　因子得点：祖父母との同居

	同居あり(n=41)		同居なし(n=72)		
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	p値
因子Ⅰ	−0.057	0.912	0.006	0.951	n.s.
因子Ⅱ	−0.129	0.802	−0.217	0.877	n.s.
因子Ⅲ	−0.186	0.676	0.031	0.916	n.s.
因子Ⅳ	−0.121	0.865	0.096	0.997	n.s.
因子Ⅴ	−0.004	0.837	0.052	0.816	n.s.
因子Ⅵ	0.133	0.953	−0.114	0.774	n.s.
因子Ⅶ	−0.193	0.793	−0.103	0.789	n.s.

n.s.:no sighificance

表3　因子得点：祖父母との会話

	よくある(n=56)		あまりない(n=57)		
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	p値
因子Ⅰ	−0.101	0.893	0.006	0.972	sug.
因子Ⅱ	−0.143	0.886	−0.227	0.815	n.s.
因子Ⅲ	−0.100	0.785	0.003	0.895	n.s.
因子Ⅳ	−0.048	0.851	0.081	1.047	n.s.
因子Ⅴ	0.015	0.683	0.048	0.942	n.s.
因子Ⅵ	−0.028	0.781	−0.021	0.915	n.s.
因子Ⅶ	−0.043	0.716	−0.227	0.849	n.s.

n.s.:no sighificance, sug.:p<0.1

表4　因子得点：祖父母との同居既往

	ある(n=70)		ない(n=43)		
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	p値
因子Ⅰ	−0.144	0.872	0.190	1.002	sug.
因子Ⅱ	−0.139	0.816	−0.260	0.902	n.s.
因子Ⅲ	−0.131	0.758	0.088	0.953	n.s.
因子Ⅳ	−0.034	0.938	0.100	0.982	n.s.
因子Ⅴ	−0.011	0.764	0.102	0.910	n.s.
因子Ⅵ	0.017	0.849	−0.091	0.850	n.s.
因子Ⅶ	−0.139	0.779	−0.129	0.812	n.s.

n.s.:no sighificance, sug.:p<0.1

表5　因子得点：祖父母以外の老人との接触機会

	ある(n=44)		ない(n=69)		
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	p値
因子Ⅰ	−0.071	0.997	0.018	0.896	n.s.
因子Ⅱ	−0.116	0.960	−0.229	0.772	n.s.
因子Ⅲ	−0.113	0.968	−0.006	0.752	n.s.
因子Ⅳ	0.132	1.027	−0.056	0.903	n.s.
因子Ⅴ	0.007	0.810	0.047	0.832	n.s.
因子Ⅵ	−0.013	0.805	−0.032	0.879	n.s.
因子Ⅶ	−0.179	0.706	−0.108	0.840	n.s.

n.s.:no sighificance

表6　因子得点：老人問題を扱ったテレビ，記事をみるか

	ある(n=87)		ない(n=25)		
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	p値
因子Ⅰ	0.030	0.916	−0.106	0.948	n.s.
因子Ⅱ	−0.180	0.884	−0.160	0.710	n.s.
因子Ⅲ	−0.029	0.834	−0.033	0.797	n.s.
因子Ⅳ	−0.008	0.953	0.038	0.935	n.s.
因子Ⅴ	0.015	0.795	0.056	0.920	n.s.
因子Ⅵ	−0.042	0.744	0.074	1.150	n.s.
因子Ⅶ	−0.206	0.779	0.110	0.803	sug.

n.s.:no sighificance, sug.:p<0.1

表7　因子得点：地域実習で高齢者に対して健康教育を行ったか

	はい(n=22)		いいえ(n=91)		
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	p値
因子Ⅰ	0.162	1.031	−0.060	0.909	n.s.
因子Ⅱ	−0.181	0.894	−0.186	0.841	n.s.
因子Ⅲ	−0.159	0.659	−0.021	0.879	n.s.
因子Ⅳ	−0.099	0.979	0.045	0.950	n.s.
因子Ⅴ	−0.020	0.673	0.044	0.855	n.s.
因子Ⅵ	0.195	0.767	−0.077	0.861	n.s.
因子Ⅶ	−0.159	0.613	−0.130	0.828	n.s.

n.s.:no sighificance

メージ変化（表9～15）

実習前の因子得点から「低値群」「中間群」「高値群」の3群に分け，実習後と比較した結果，低値群ではすべての因子において得点が高くなり，有意な差が見られた．

中間群では「活動性」「気分性」において得点が高くなり，有意な差が見られたが，他の因子では差が見られなかった．

高値群では「気分性」を除くすべての因子において得点が低くなり，有意な差が見られた．

5，学生の属性による実習前後の「老人」イメージの変化（表16～21）

表8　因子得点変化：実習前後(n＝106)

	前		後		
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	p値
因子Ⅰ	−0.004	0.940	0.049	0.835	n.s.
因子Ⅱ	−0.178	0.854	0.186	0.880	＊＊
因子Ⅲ	−0.026	0.837	0.065	0.922	n.s.
因子Ⅳ	0.029	0.953	0.001	0.838	n.s.
因子Ⅴ	0.016	0.771	−0.030	0.866	n.s.
因子Ⅵ	−0.012	0.845	0.051	0.860	n.s.
因子Ⅶ	−0.163	0.774	0.166	0.848	＊＊

n.s.:no sighificance, ＊＊.:p<0.01

表9　実習前因子得点別因子得点変化：因子Ⅰ

	前		後		
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	p値
低値群(n＝26)	−1.049	0.442	−0.230	0.808	＊＊＊
中間群(n＝53)	−0.094	0.269	0.052	0.686	n.s.
高値群(n＝27)	1.182	0.818	0.313	1.046	＊＊

n.s.:no sighificance, ＊＊.:p<0.01, ＊＊＊:p<0.001

表10　実習前因子得点別因子得点変化：因子Ⅱ

	前		後		
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	p値
低値群(n＝25)	−1.352	0.624	0.016	0.808	＊＊＊
中間群(n＝55)	−0.109	0.290	0.232	0.916	＊＊
高値群(n＝26)	0.805	0.333	0.250	0.881	＊＊＊

＊＊.:p<0.01, ＊＊＊:p<0.001

表11　実習前因子得点別因子得点変化：因子Ⅲ

	前		後		
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	p値
低値群(n＝26)	−1.069	0.360	−0.112	0.944	＊＊＊
中間群(n＝53)	−0.034	0.264	−0.005	0.768	n.s.
高値群(n＝27)	0.993	0.634	0.375	1.121	＊＊

n.s.:no sighificance, ＊＊.:p<0.01, ＊＊＊:p<0.001

表12　実習前因子得点別因子得点変化：因子Ⅳ

	前		後		
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	p値
低値群(n＝26)	−1.131	0.499	−0.220	0.813	＊＊＊
中間群(n＝54)	0.005	0.409	−0.031	0.826	n.s.
高値群(n＝26)	1.238	0.542	0.288	0.837	＊＊＊

n.s.:no sighificance, ＊＊＊:p<0.001

表13　実習前因子得点別因子得点変化：因子Ⅴ

	前		後		
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	p値
低値群(n=25)	−0.851	0.457	−0.361	1.016	＊
中間群(n=55)	−0.077	0.244	−0.128	0.696	n.s.
高値群(n=26)	1.045	0.546	0.493	0.835	＊＊

n.s.:no sighificance, ＊:p<0.05, ＊＊:p<0.01

表14　実習前因子得点別因子得点変化：因子Ⅵ

	前		後		
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	p値
低値群(n=25)	−0.989	0.418	−0.118	0.619	＊＊＊
中間群(n=54)	−0.095	0.244	0.030	0.990	n.s.
高値群(n=27)	1.057	0.696	0.252	0.753	＊＊＊

n.s.:no sighificance, ＊＊＊:p<0.001

表15　実習前因子得点別因子得点変化：因子Ⅶ

	前		後		
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	p値
低値群(n=28)	−1.078	0.390	0.044	0.798	＊＊＊
中間群(n=53)	−0.168	0.284	0.078	0.726	＊
高値群(n=25)	0.874	0.423	0.488	1.071	n.s.

n.s.:no sighificance, ＊:p<0.05, ＊＊＊:p<0.001

表16　実習前後因子得点変化：祖父母との同居別

		前		後		
	同居	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	p値
因子Ⅰ	あり	−0.020	0.931	0.056	0.786	n.s.
	なし	0.005	0.952	0.045	0.866	n.s.
因子Ⅱ	あり	−0.143	0.808	0.048	0.949	n.s.
	なし	−0.197	0.884	0.263	0.836	＊＊＊
因子Ⅲ	あり	−0.123	0.633	−0.044	1.143	n.s.
	なし	0.028	0.932	0.126	0.775	n.s.
因子Ⅳ	あり	−0.048	0.842	−0.012	0.857	n.s.
	なし	0.072	1.014	0.008	0.834	n.s.
因子Ⅴ	あり	−0.029	0.798	−0.158	1.103	n.s.
	なし	0.041	0.761	0.041	0.700	n.s.
因子Ⅵ	あり	0.132	0.938	0.031	0.706	n.s.
	なし	−0.093	0.785	0.063	0.940	n.s.
因子Ⅶ	あり	−0.291	0.712	0.247	0.890	＊＊
	なし	−0.091	0.803	0.120	0.827	n.s.

同居あり，n=38，同居なし，n=78，n.s.:no sighificance，＊＊.:p<0.01，＊＊＊:p<0.001

表17　実習前後因子得点変化：祖父母との会話別

	会話	前 平均値	前 標準偏差	後 平均値	後 標準偏差	p値
因子Ⅰ	あり	−0.077	0.907	0.004	0.866	n.s.
	なし	0.070	0.976	0.095	0.808	n.s.
因子Ⅱ	あり	−0.153	0.894	0.099	0.939	n.s.
	なし	−0.202	0.819	0.272	0.817	＊＊
因子Ⅲ	あり	−0.050	0.760	0.015	0.771	n.s.
	なし	0.003	0.916	0.116	1.057	n.s.
因子Ⅳ	あり	0.009	0.829	0.042	0.808	n.s.
	なし	0.049	1.071	−0.040	0.873	n.s.
因子Ⅴ	あり	−0.002	0.639	−0.030	0.815	n.s.
	なし	0.033	0.890	−0.031	0.922	n.s.
因子Ⅵ	あり	−0.038	0.756	−0.056	0.709	n.s.
	なし	−0.013	0.933	0.159	0.984	n.s.
因子Ⅶ	あり	−0.104	0.665	0.130	0.768	sug.
	なし	−0.221	0.873	0.201	0.927	n.s.

同居あり，n＝53，同居なし，n＝53，n.s.:no sighificance，sug.:p＜0.1，＊＊.:p＜0.01

表18　実習前後因子得点変化：祖父母との同居既往別

	同居既往	前 平均値	前 標準偏差	後 平均値	後 標準偏差	p値
因子Ⅰ	あり	−0.128	0.890	−0.024	0.802	n.s.
	なし	0.201	0.996	0.170	0.883	n.s.
因子Ⅱ	あり	−0.150	0.825	0.074	0.894	n.s.
	なし	−0.224	0.907	0.370	0.835	＊＊＊
因子Ⅲ	あり	−0.108	0.733	−0.007	1.034	n.s.
	なし	0.109	0.981	0.184	0.696	n.s.
因子Ⅳ	あり	0.000	0.928	0.103	0.878	n.s.
	なし	0.077	1.004	−0.168	0.747	n.s.
因子Ⅴ	あり	−0.029	0.742	−0.102	0.928	n.s.
	なし	0.089	0.822	0.088	0.749	n.s.
因子Ⅵ	あり	0.010	0.841	−0.054	0.701	n.s.
	なし	−0.049	0.862	0.225	1.060	n.s.
因子Ⅶ	あり	−0.202	0.740	0.100	0.831	＊
	なし	−0.097	0.833	0.274	0.875	＊

同居あり，n＝66，同居なし，n＝40，n.s.:no sighificance，＊.:p＜0.05，＊＊＊:p＜0.001

表19　実習前後因子得点変化：祖父母以外の老人との接触機会別

	接触機会	前 平均値	前 標準偏差	後 平均値	後 標準偏差	p値
因子Ⅰ	あり	−0.083	0.989	−0.064	0.888	n.s.
	なし	0.046	0.913	0.120	0.798	n.s.
因子Ⅱ	あり	−0.1115	0.961	−0.017	1.061	n.s.
	なし	−0.217	0.784	0.314	0.724	＊＊＊
因子Ⅲ	あり	−0.063	0.965	0.072	0.834	n.s.
	なし	−0.003	0.753	0.061	0.980	n.s.
因子Ⅳ	あり	0.166	1.032	0.110	0.870	n.s.
	なし	−0.058	0.897	−0.068	0.816	n.s.
因子Ⅴ	あり	−0.035	0.711	−0.036	0.905	n.s.
	なし	0.048	0.811	−0.027	0.848	n.s.
因子Ⅵ	あり	−0.030	0.783	0.143	1.052	n.s.
	なし	−0.001	0.888	−0.007	0.717	n.s.
因子Ⅶ	あり	−0.208	0.702	0.269	0.872	＊＊
	なし	−0.134	0.821	0.100	0.832	sug.

同居あり，n＝41，同居なし，n＝65，n.s.:no sighificance，sug.:p<0.1，＊＊.:p<0.01，＊＊＊:p<0.001

表20　実習前後因子得点変化：老人問題のテレビ，記事への関心別

	関心	前 平均値	前 標準偏差	後 平均値	後 標準偏差	p値
因子Ⅰ	あり	0.026	0.910	0.065	0.859	n.s.
	なし	−0.034	1.015	0.016	0.757	n.s.
因子Ⅱ	あり	−0.177	0.884	0.246	0.907	＊＊
	なし	−0.131	0.722	−0.040	0.759	n.s.
因子Ⅲ	あり	−0.034	0.841	0.081	0.912	n.s.
	なし	0.100	0.728	0.015	1.002	n.s.
因子Ⅳ	あり	−0.021	0.963	0.037	0.881	n.s.
	なし	0.152	0.875	−0.169	0.643	n.s.
因子Ⅴ	あり	−0.020	0.756	−0.033	0.901	n.s.
	なし	0.117	0.835	−0.005	0.751	n.s.
因子Ⅵ	あり	−0.036	0.747	0.085	0.892	n.s.
	なし	0.125	1.171	−0.083	0.747	n.s.
因子Ⅶ	あり	−0.225	0.777	0.163	0.905	＊＊
	なし	0.084	0.750	0.220	0.573	n.s.

同居あり，n＝84，同居なし，n＝21，n.s.:no sighificance，＊＊.:p<0.01

表21　実習前後因子得点変化：地域実習での高齢者健康教育実施別

	実施	前 平均値	前 標準偏差	後 平均値	後 標準偏差	p値
因子Ⅰ	あり	0.195	1.044	0.096	0.732	n.s.
	なし	−0.053	0.913	0.038	0.862	n.s.
因子Ⅱ	あり	−0.146	0.900	0.122	0.868	n.s.
	なし	−0.186	0.847	0.202	0.888	＊＊
因子Ⅲ	あり	−0.149	0.674	−0.030	1.122	n.s.
	なし	0.004	0.874	0.089	0.872	n.s.
因子Ⅳ	あり	−0.089	1.002	−0.022	0.861	n.s.
	なし	0.058	0.945	0.007	0.837	n.s.
因子Ⅴ	あり	0.034	0.639	−0.115	0.646	n.s.
	なし	0.011	0.804	−0.009	0.914	n.s.
因子Ⅵ	あり	0.218	0.778	0.073	0.495	n.s.
	なし	−0.069	0.856	0.046	0.931	n.s.
因子Ⅶ	あり	−0.137	0.619	0.106	0.538	n.s.
	なし	−0.169	0.811	0.180	0.910	＊＊

同居あり，n＝21，同居なし，n＝85，n.s.:no sighificance，＊＊.:p<0.01

2で用いた学生の属性による実習前後の因子別得点変化は，「活動性」に対して「祖父母と別居群」「祖父母との会話があまりない群」「祖父母との同居経験が無い群」「祖父母以外の老人と接触が無い群」「老人問題のテレビ，記事を見る群」「地域看護実習で高齢者対象に健康教育を実施していない群」で得点が高くなり，有意な差が見られた．

また，「気分性」に対しては「祖父母と同居群」，「老人問題のテレビ，記事を見る群」，「地域看護実習で高齢者対象に健康教育を実施していない群」で得点が上昇し，有意差が見られた．加えて，祖父母との会話の有無，同居経験の有無，祖父母以外の老人との接触の有無に関わらず実習後に得点が高くなり，有意な傾向にあった．その他の因子では，実習後に明らかな変化は見られなかった．

考　　察

今回研究対象となった本学4年生は，1年次に早期体験実習を，2・3年次に基礎看護実習を行った後，4年次前期より臨床看護実習が開始となる．老人看護実習は地域看護実習を終え，それ以外の何らかの科目の実習を終えている7月中旬より10月末まで実施される．実習形態は，本学医学部付属病院泌尿器科皮膚科混合病棟1週間（以下病棟実習とする），T市内医療法人老人保健施設2カ所（1学生につきどちらか一カ所）1週間（以下施設実習とする）の計2週間である．病棟実習では主として泌尿器科疾患を持つ患者に対して看護が展開され，施設実習では痴呆症状を呈する入所者に対して，日常生活援助活動が展開される．このように，学生が実習中接する高齢者の大半は，病弱者である．故に，学生が実習を通して「老人」に抱くイメージは，病弱者という限定されたものとなり，高齢社会全体をも悲観的なイメージで捉えてしまうことも懸念される．

今井ら[11]や六角[12]が看護学生と一般大学生との老人イメージの比較を行った調査では，看護学生は一般大学生に比べ否定的イメージを持っていたとの報告があった．また，中野ら[13]の行った調査では，高齢者と看護学生での老人イメージの比較の結果，高齢者に比べると学生は老人イメージを

否定的に捉える傾向が見られ，高崎ら[14]の大学生，会社員，老人クラブ会員に「老後」のイメージを聞いた調査では，3者間にイメージの大きなずれがあった．また，守屋ら[15]が行った青年層，壮年層，老年層の三世代で行われた調査では，三世代の中で青年層が他の年代層と比較して老人イメージを好意的に受け止めていなかった．これらのように各世代間のずれや教育過程で生じているずれを埋め，老人に対する偏見を取り除くことも老人看護教育の大きな使命であると思われる．

そのような中，様々な方法で教育実習が展開され，多田ら[16]の報告では，講義やその中で紹介されるVTRの視聴だけでも学生の高齢者に対する印象が変化していることや，実習の中に健康な老人に接する場を取り入れた結果，老人の積極的側面を見出すようになったとの報告もある[17]．このように，実習場の環境，受け持ち患者選定，実習展開方法などにより，「老人」イメージの変化が生じてくると思われる．

① 学生の属性による老人イメージの違い

今回の調査では，実習前の「老人」イメージは，学生の属性による明らかな影響が見られなかった．保坂ら[8]が行った調査によると，「老人」イメージを規定する要因として，対象者の基本的属性よりも老人への関心や祖父母との接触など個人の経験に基づく要因の方が重要であるとしており，「劣った－優れた」「無能な－有能な」といった「有能性」，「静的－動的」「暇そう－忙しそう」といった「活動・自立性」に対しては「老人，老人問題への関心」「老人問題を扱う授業」など外部からの情報やそれに刺激された老人に対する積極的態度が重要な規定要因になっていた．また，「空っぽな－満たされた」「灰色－バラ色」というような「幸福性」，「主観的－客観的」「強情な－素直な」といった「協調性」，「厳しい－優しい」「威張った－へりくだった」といった「温和性」，「消極的－積極的」「閉鎖的－開放的」といった「社会的外向性」に対しては「祖父母・それ以外の老人との接触」などの身近な老人との経験の影響が大きいとしている．また多田[7]の調査によると「祖父母との会話の頻度」は，実習前の老人に対する印象に影響をもたらす要因であり，実習によってその影響は減少している．だが，本研究では学生個人の老人との接触機会の有無では明らかな有意差は無く，上記の両者の仮説は当てはまらなかった．その理由として，多田7)の実習前には学生の属性による老人のイメージの違いが大きかったが，実習後に差が見られなくなったという報告から，本学においても，老人看護実習前の他科の実習により，学生の老人イメージが均等化され，それらの属性の影響が生じなかったことが考えられる．

しかしながら，実習前後の変化をみると，「祖父母と別居している群」「祖父母との会話がない群」「祖父母との同居経験が無い群」「祖父母以外の老人との接触が無い群」「地域看護実習での高齢者対象に健康教育を実施していない群」といった，生活体験でほとんど老人と接触を持たない学生について，「活動性」に対して実習後は有意な肯定的変化が見られた．

中野ら[18]の小学生と中学生の老人イメージの調査によると，「活動性」という点で年齢が上がるにつれ否定的イメージとなり，中学生の段階では情緒的には老人を肯定的に評価しているものの，活動性や身体面に関しては否定的な見方が表出し始めていたとの報告がされている．それと類似した傾向が本学の学生にも見られたことが考えられ，本学では，老人との接触の有無での2群間には，実習前において明らかな違いが生じなかった．しかし，前述の小学生同様，あまり老人の実態を知らないと思われる老人と接触のない学生には，実習前持っていた活動性に対する否定的イメージが，実習中，予想に反して活動性が高かったことを強く印象づけ，肯定的イメージに変化したものと思われる．また，別の要因として看護学生という側面から見ても，社会的ニーズから「寝たきりの高齢者」に対する看護活動を授業などで取り上げることが多く，そのイメージが「老人」のイメージに直結していることも考えられる．実際に本学の学生は，老人看護実習前に実施される地域看護実習で，寝たきり又はそれに準じた高齢者に対する訪問看護活動を実習している．その時のイメージから，老人看護実習での寝たきりではない受け持ち患者との接触を持つ中で，それまで老人と接す

ることがなかった学生は，より肯定的なイメージに変化したものと思われる．

だが鳴海ら[19]や他の研究[4)20)]からも，老人ケアに対する態度や老人イメージは，身内の世話や実習等で老人の世話を経験した者の方が，より肯定的イメージに変化したとの報告がある．しかし，本学ではより老人と接触がある学生にはその現象がみられなかった．このことは老人と接触のあった学生は，実習前のイメージと今回の老人看護実習でのイメージが加味されたイメージに変化したと思われる．そしてそれは，老人と接触の少ない学生のように，肯定的なイメージに変わるまでにはいかなかったと考えられる．

②実習前後の「老人」イメージ変化

上記のとおり，本学での実習は病弱者が対象となっている．しかし，病棟実習では，泌尿器科皮膚科混合病棟での受け持ち患者のほとんどが泌尿器科疾患を持つ患者であることから，外科的要素が強く，手術目的や精査目的のため入院となるケースを受け持つことが多い．よって食事，入浴，排泄などのADLに対して，全介助の患者は1割にも満たず，ほぼ自立していたり，または部分介助のみの援助を必要とする患者がほとんどであり，自立度が高い．また特定機能病院という特徴から，療養型病床群の病院と比べ，入院期間が短い．施設実習においても，痴呆症状によるADL介助は必要ではあるが，身体可動性の問題がある入所者を受け持つことは少ない．

よって本学の実習は，藤岡ら[5]が示す実習タイプの分類であると，「見習い実習型」や「技能訓練型」のような，学生が患者ケアに明け暮れる，膨大な実習記録に追われるという実習ではなく，ゆとりを持った，あるがままの老人を受け入れる実習形態をとっている．その結果，学生は老人の生活のリズムや，老人とのコミュニケーションから，老人の生活背景を知ることにより，「活動性」「気分性」の2因子に関連した情報を得，これらの因子得点が肯定的に変化したものと思われる．

また因子得点別で3群に分けた結果では，低値群は実習後すべての因子において，また中間群は「活動性」「気分性」において有意に肯定的イメージに変化した．高値群では「気分性」を除くすべての因子項目において，有意に否定的イメージに変化していた．このことは，低値群は実習を通して，老人の持っている力強さに目を向けられるようになったためと考えられる．また，高値群は実習を通してより現実的に老人を見ることができるようになったことを示していると考えられる．

今回の調査では学生のイメージ変化を見たが，筆者らが先に行った研究[21]では，本学実習で学習できた内容をKJ法を用いてまとめた．結果，学生は実習前に持っていた老人イメージが，実習を経験したことにより変化し，そのことにより学生に行動変化が見られたことが明らかとなっている．学生の老人イメージが変化したことは，梶田[22]が老人を理解するのに必要だとしている「目の前の患者が自分とは異なったことを『事実』なり『真実』なりとしており，その人が自分とは異なった体験，経験を蓄積しているからである」ことが，実習を通して体験できたからだと思われる．その結果，個人にあった看護の必要性を認識できたことが先行研究と併せて明らかとなった．

今回の調査では，実習前後による学生の老人イメージの変化をみるために学籍番号の記載を学生に促した．その結果，回収率が100％となった．そのことは，学生が授業の一環として捉えたり，調査に協力しないことで実習成績が不利となることを予測したことも考えられる．この点は調査に当たり，研究者側の倫理的配慮が欠けていた恐れがあり，今後の検討すべき点であった．

今後の課題として，今回の調査は「老人」という大きな枠組みに対して学生のイメージ変化を見たが，老人といっても「健康な老人」から「障害を持つ老人」まで，「独居老人」から「家族の中に位置する老人」まで，様々な状況で生活している．これからの看護職は，どのような状況下におかれる老人であろうとも接する機会が生じ，対応を求められるであろう．そのためにも我々教育者は，時代のニーズに応じた授業としての実習教育を行っていく必要がある．そのためには，「医療」という枠だけにとどまらず「保健」「福祉」という観点からも考慮した実習環境の設定が必要であろう．そういった実習を実現するためには，学生の十人十色の状況におかれた老人に対するイメー

ジを評価し，学生がどのような環境下にある老人をも肯定的イメージで捉え，学生の学習意欲をかき立てるような実習を行うことが必要である．そして，そのことは卒業後の現場実践で生かされ，卒業後多数の健康障害のある老人と接することが外的刺激となり，老人への消極的イメージが増す要因となっていた渡辺ら[23]の調査結果への１つの予防策となりうると思われる．

結　　論

本学老人看護実習にて老人に対するイメージがどのように変化したのかを知る目的に本学看護学科４年生115名を対象にSD法を用いて調査を行った．

その結果以下のことが明らかとなった．

１，因子分析の結果から「行動性」「活動性」「幸福性」「温和性」「有能性」「社会的外向性」「気分性」の７因子を抽出した．

２，実習前の老人に対するイメージでは学生の生活背景による違いは見られなかった．

３，因子ごとに実習前後の得点を比較した結果，「活動性」「気分性」の２因子が実習後により肯定的に変化していた．

４，実習前の因子得点の上位25％を高値群，下位25％を低値群，その他を中間群の3群に分け因子ごとに実習前後の得点を比較した結果，高値群はほぼすべての因子において実習後により否定的なイメージへと変化し，低値群はすべての因子においてより肯定的イメージへと変化が見られた．

５，学生の生活背景により実習前後でのイメージの比較を行った結果，「活動性」「気分性」において，日頃あまり「老人」と接触のない学生が，実習後により肯定的イメージで捉えている傾向が見られた．

以上のことから，本学での老人看護実習では，「活動性」「気分性」において肯定的に老人イメージを変化させる効果があり，特に日頃「老人」と接触のない学生にとって，「活動性」に，より肯定的イメージを持たせるものであることが明らかとなった．また，実習前に老人に対して否定的なイメージを持っていた学生は，老人の持っている力強さや有能さに目を向けられるようになり，肯定的なイメージを持っていた学生は，より現実的に老人を見ることができるようになったことが示唆された．

文　　献

１）氏家幸子，田島桂子，高崎絹子他：老人看護教育の課題とこれからへの期待，Quality Nursing，1(7)：4-16，1995.

２）野口美和子：老人看護学再考－自我の発達の観点から，Quality Nursing，3(10)：4-9，1997.

３）永井則子：プリセプターシップの理解と実践，新人ナースの教育法，日本看護協会出版会，東京，1999.

４）小山真理子，牛山真佐子，田村正枝他:看護大学生の老人及び老人ケアに対する態度，看護教育，36(9):815-819，1995.

５）藤岡完治，村島さい子，安酸史子：学生とともに創る臨床実習指導ワークブック，医学書院，東京，1996.

６）水越敏行：授業評価研究入門，明治図書，1982.

７）多田敏子：老人看護学における臨地実習による看護学生の高齢者に対する印象の変化，老年看護学，１:63-70，1996.

８）保坂久美子，袖井孝子：大学生の老人イメージ－SD法による分析－，社会老年学，27:22-33，1988.

９）岩下豊彦:SD法によるイメージの測定，川島書店，東京，1983.

10）神宮英夫:印象測定の心理学，川島書店，東京，1996.

11）今井雪香，片岡万里:老人イメージに関する調査(1) －看護学生と一般大学生との比較－，日本老年看護学会第二回学術集会抄録集:16，1997.

12）六角僚子:高齢者観比較－看護婦と一般・看護学生の場合－，日本老年看護学会第３回学術集会抄録集：74，1998.

13）中野悦子，西川千歳，丁野みどり他：高齢者と看護学生の老人イメージの特性，第25回日本看護学会集録（老人看護）：99-101，1994.

14）高崎絹子，坂口千鶴，谷口好美：老人看護学

の理念と教育の展開, Quality Nursing, 1(7): 17-33, 1995.
15) 守屋滝乃, 稲垣宣子, 鈴木律代他:「老人」に対する意識調査－三世代における「老人観」と老人イメージ, 看護教育, 28(9):537-541, 1987.
16) 多田敏子:看護学生の老年観の育成におけるVTR活用の意義, 教育研究学内特別経費による研究報告書, 徳島大学紀要, 487-494, 1988.
17) 大崎ゆき子, 五十嵐愛子, 内田美智子：成人・老人看護学実習についての一考察－健康な老人に接したことをとおして－, 第23回日本看護学会集録（看護教育）: 257-260, 1992.
18) 中野いく子, 冷水　豊, 中谷陽明他：小学生と中学生の老人イメージ－SD法による測定と比較, 社会老年学, 39:11-22, 1994.
19) 鳴海喜代子：看護学生の老人観に関する研究第4報, 千葉大学看護学部紀要, 12, 11-19, 1990.
20) 菱沼典子, 太田喜久子, 小山眞理子他:看護学生の老人イメージについての一考察, 看護教育, 36(8): 730-735, 1995.
21) 前畑夏子, 小池孝枝, 服部ユカリ：老人看護実習を通して学生が学んだ内容－実習レポートからの考察－, 日本老年看護学会第3回学術集会抄録集：86, 1998.
22) 梶田叡一:高齢者の自己概念について－老人をケアする人たちに望むこと, Quality Nursing, 3(10): 10-13, 1997.
23) 渡辺京美, 福沢節子, 松岡清子：成人・老人看護学実習の一考察第3報－実習効果から卒後教育への継続を考える－, 第25回日本看護学会集録（老人看護）: 37-39, 1994.

A survey of the changing image of Gerontological nursing students.

Natsuko MAEHATA, Yukari HATTORI, Yuchi NARUSE and Masami OHNO

Department of Community and Gerontological Nursing, School of Nursing,
Toyama Medical and Pharmaceutical University

Abstract

The present writer's intention and purpose in this article is to understand how students' image of old people changed after gerontological nursing them.

In the present study Scmantic Differetial Method were used.

This research was done on 115 nursing department students.

Through the results, the following became clear.

1) Through the students' experience, seven characteristics of old people were found. They are: constructive people, active people, optimistic people, gentle people, people of ability, diplomatic people and moody people.

2) Before, the students' enviroment didn't have an effect on their image of old people.

3) After gerontological nursing, their image of the active and moody kind of people improved.

4) The students who had good images before, changed for the worse. On the other hand, the students who had bad images before, changed for the better.

5) The students who never had contact with old people before, their image changed for the better.

Key words

image of old people, gerontplogical nursing,
nursing department students